繪本太閤記

三編

四

特
へ伊13
1833
2-28

へ13特
1833
28

繪本太閤記三篇巻之四

目録

武田勝頼之孫士離散之話
本曾左馬介弟陣に勝頼と戦ふ圖
高遠の城陥仁科盛信討死之話
信忠卿留士川を渡るの城を攻る圖
信忠卿衆軍を励ゝて一番乗の圖
浜彷勝右衛門が妻女勇戦の圖
真田安房守昌幸曰奇謀話
目圖

勝頼郎内へ退去の圖

武田勝頼父子死天目山話

小山田左兵衛尉人質を集る圖

武田信勝土屋惣蔵勇戦討死の圖

小田勢天目山を囲む圖

秀吉堀尾茂助を召て策計を献る圖

續本朝閥閲三篇巻之四

武田勝頼之臣士離散

法令明なるゝ故罰信ならざる所いえよ今所も止らざるを以て敷所を進まゝ百万みとつゝも国毋ふ小義あるんや申斐信濃上野駿河の大守武田大膳大夫勝信の道信云い日本国の強勇なる者なりと雖も仁智勇厳を兼其威名を海内に振ひ遠国に着なりと雖日天正元年冬州の陣中に扣ひて率去あり其子息勝頼父の世業を継ぎ国の大守たりし勇武の者なれども其性質匹夫佞臣にして長坂左衛門入道長閑跡部大炊助勝資両人を寵し彼等ゴ云と度く私慾を恣にし政令を乱悪行日々に増り名れば善代の忠臣ことを歎き屢諫言をとつゝも勝頼曾て毛を用ひざる故に抑て賢

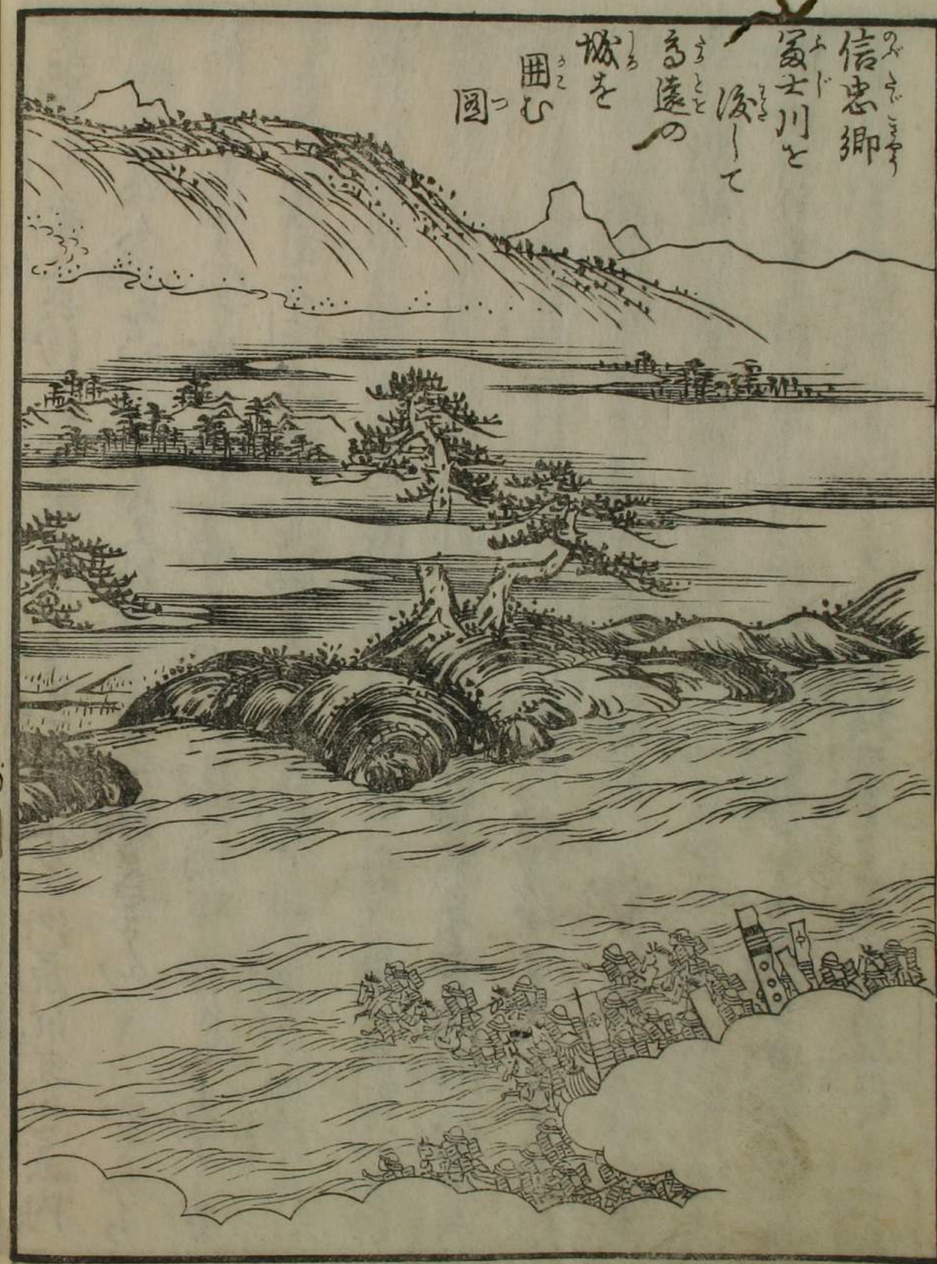
木曾左馬
阪
多安作うそ
勝敗と戦
図

臣いをざろう侍人ゝを恩寵を得之国の北条ゝ弱強うりたる天正三年
長篠ゝ於ひく合戦の時武田の滅亡を計り討死をるゝなるゝ武
田兵庫助山縣三郎兵衛馬場美濃守内藤修理亮原昌八郎
安中彩菊真田源五左衛門尉兵部丞右衛門尉高坂源五郎三
枝松勘解由撰田十郎兵衛名和無理之助等を始めとし三千余人
悉死せり之より武田家弥衰弊して侍臣場〻撰ゝ家〻悉ゝ邪
を引ゝ家ゝ甲信野辺の諸士及び農工商ゝまで悉と合戦
者也されば信濃国本曽左馬助義昌ハ伊勢守源義仲の後流み
て武田勝頼の従弟之信玄世の時武田の幕下に属し信玄ゝ女を
娶本曽の四領を安堵して安三の服心なりゝふ信玄没して後勝頼
母乃と引ひ年〻課役をほ百姓を虐ぬるゝ義昌源〻之を恨ゝ

踊ゝ忽叛心を発し本家濃の侍人尚本久兵衛射ゝ付て彼阜ゝ到り
降参して甲州征伐の怨せんと欲て彼阜の城を中ゝ信長卿ゝ
信長公ゝ記し給ふ信長公本曽ゝ武田ゝ安三の味方なるゝを知り給
ひ給ふ之を免給ひ家ゝ於ひく義昌ゝを人質ゝ出して其
疑ひを解本曽ゝ家人ゝ村左京と云者密ゝ甲州ゝ之り義昌ゝ叛
心を勝頼ゝ告ぐ勝頼大ゝ怒り不日ゝ軍勢を出し本曽を滅ぼんと
一族武田左馬助信豊ゝ仰保治部太輔等ゝ七千余人を以本曽の城を
攻討む左馬助義昌ゝ和睦の切ゝ結ゝ一戦ゝ勝利を得武田乃
西ゝ引ぐゝ於ひく甲州ゝ級を上ゝ家ゝ於ひく上郎勝頼亟始り天正十
年二月二日嫡子太郎信勝一族左馬助遊遥軒を始めとし其勢二万
余騎甲州を立て本曽退治の為信濃の上原ゝ着陣を且小田

勢の後詰ひんぬきを計諸方の城々に軍勢を籠置んと甚く分をこゝと
先伊奈郡る遠の城より仁科又郎信盛小山田織中守を先と守る大
の城より日和大和入道家英小原丹後守安中左近を籠せ深志の城さい
馬場民部少輔三郎田信郎右衛門横田甚又郎を守る諏訪勝頼の城
い諸賀兵部丞拾郎の城い朝日奈弾正忠高遠城河守田中の城い芦田下総を先と
其外城々ゆりなく軍兵を入置国の諸城とりわけ義昌勝頼大
軍ゝて向ふと聞信長公御父子加勢をそゝ云て信長公南表征伐の
ゝゝと宮三月に日より打立給ふ先中ゝ信忠卿又一万余騎本曽口に義向
ける右大臣信長公七万余騎にて伊奈口に向ひ給ふ森又郎八三万
余騎飛弾口参州勢三万余騎河信小笠原三万余騎関東に
思ひ〳〵に打立ゝ宮ゝ武田方伊奈の城い下條伊豆守籠りける

其家人下条九兵衛と云る者殺心を企て小田方の河尻肥前守内
應して其人数を引入ゝ〳〵べ大ゆる伊豆守大ゆるきさんぐゝよりあてゆち
ゆるゝ云ゝ伊奈郡郎附の小田家入属諸軍物ゝ云と勇
ゝ進む武田方信濃国松尾の城を小笠原掃部助小田家入降参
信忠卿の侍大将国平八郎森勝蔵と示合せ勝蔵寺に引入けるゝ
国森の二ゆ先陣して責ゝ斬ゝ信忠勢ゝと下ゝ強勢討る者
森のおとし小笠原掃部助ゝ入ゝ烟を揚て小田の勢をゝ引ゝ云
て後国の城を固め居し菖西織部保科彈正忠ゝ思ひ〳〵十日
目の夜戦ゝ及ぶ城を捨て逃ゆゝ国平八郎勝蔵退討て云と
斬ゝ三百余人無文ゆる武田に郎勝蔵ゝ勝蔵ゝ敗勢を又度て甚心を苦め
諸ゆを集め陽戦の会議ゝ云ゝ衆議区ゝて変せん定ゝ上乃



信忠卿
冨士川を
渡して
高遠の
城を
囲む
図

示す陣を立て居られたるで武田の運の亮めくる甚中に義信侯討せんと進むる者もあれども白地に出て戦ひ勝敗を分んと諫むる居中もあれど長坂長閑己が命の情さうや勇角拒て勝敗の戦ひを止むるようく適〻忠志ある武士も心離るを捨て落ち者ある〻ひは十六日本曽左馬助苗木久兵衛等並坂が進てある弁作み抑第る武田方の今福筑前守七る余人を以て戦ふ〻ひ軍卒心に法ち〻ひ紛れ討死百七十余人討死〻本陣として後を〻ひ討て信忠卿本曽が軍忠を賞し感状を賜ふ御加勝として小田原吾長兵衛尉田孫十郎信次等を〻る弁作と城拾原の陣を立る武田方孫志の城より馬場民部少輔多田次郎右衛門横田甚五郎等おの〻て日数を送る信忠卿い大軍と〻軍累封口ふ雑の切不と謝

平谷の陣を居られ大軍の城を乗らるとて保ち〻ふて大軍の籠〻る軍勢戦いざる者にて紛〻ふ〻ふ〻落ち〻れ〻ふ日の大和入る宗英加勢小原丹後守此り方く城を用て退散と信忠卿力を用ひどて城を乗る河尻肥前守として大軍の城を守り亜〻ふ〻んで敵後ふ〻ふ〻ふ森勝蔵国平先陣を勧め不〻方〻ふ孔坊〻ふ〻ふ甲信の武士散〻欲とる者ふ〻悪〻陣条に己が余り村〻の郷民百姓己が家に火をうけて武田ふ敵き一撰をふ〻ふ〻ふ〻ふ勝れば悪ふ日〻に拾遺万民虐政ふ苦〻武田家の亡んふを待あ也山のぶ〻して国家のちびざるいまざ〻ふ〻じ

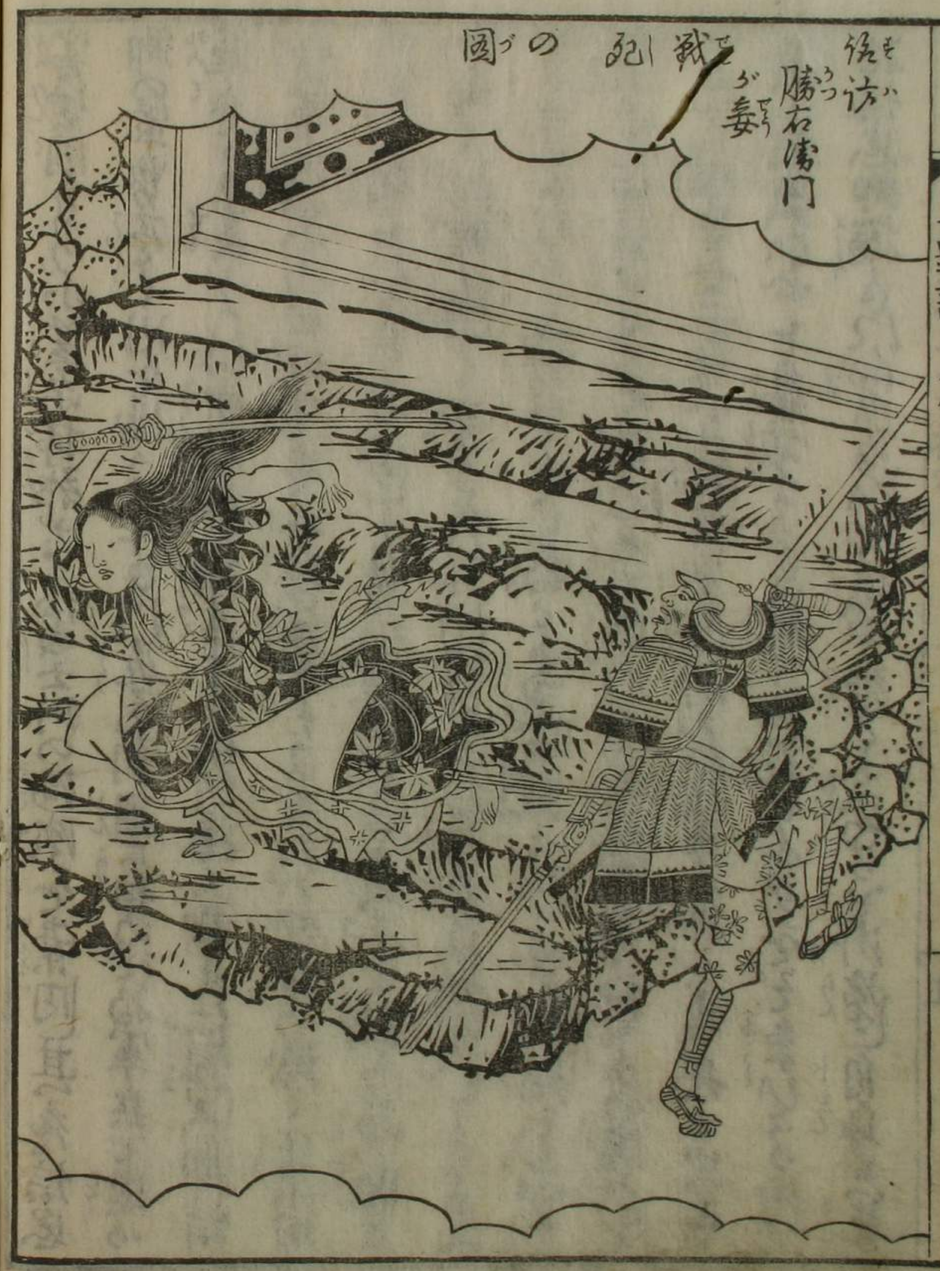
高遠之城脇仁科五郎信盛討死

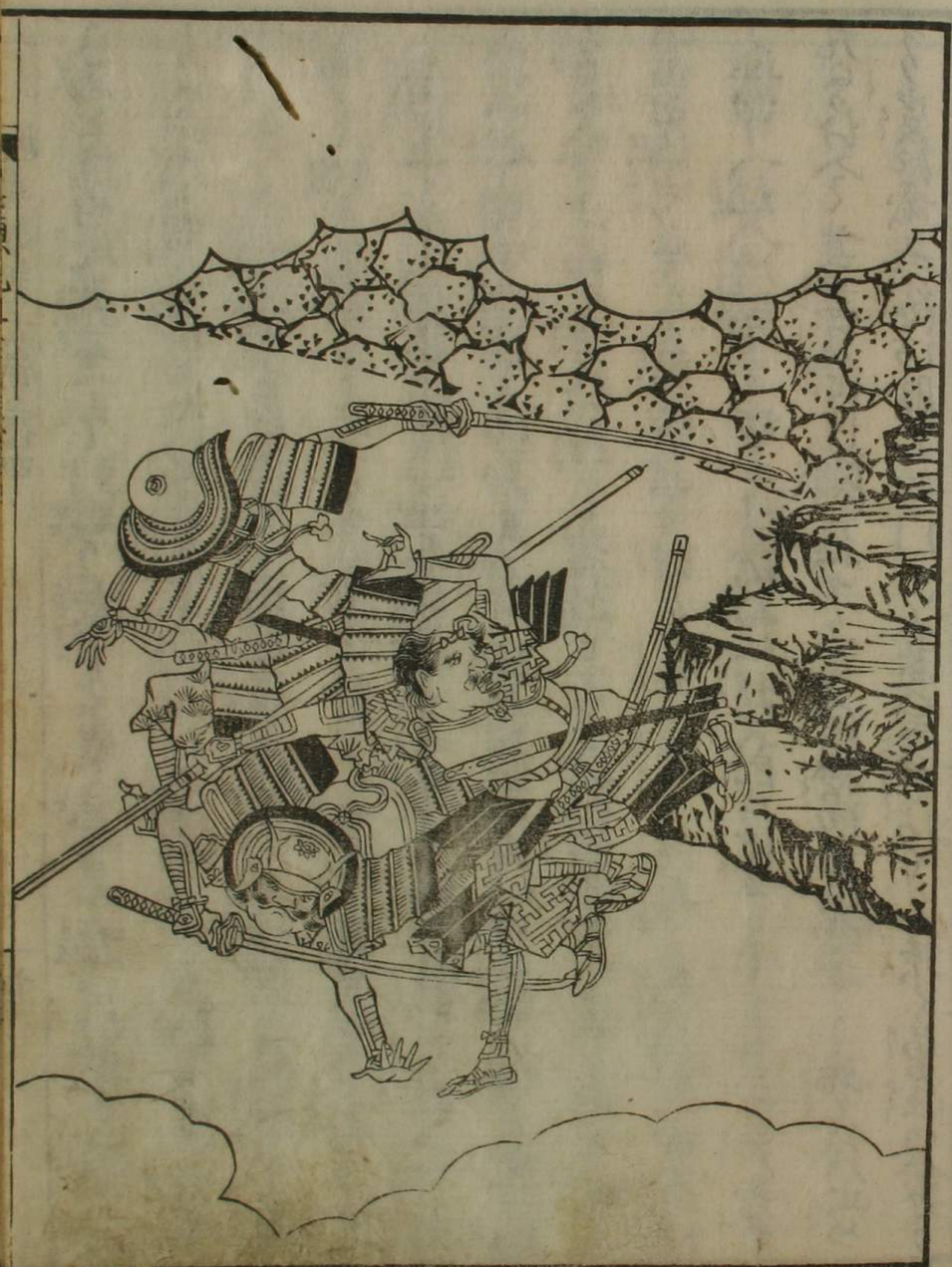
故入道信玄の督に尾の城を穴山玄番入る梅雪斎とふ者勝敗の

信忠卿
衆軍を
励して
一番
乗の
図

女を武田に嫁んと契約の宮づりぬ給るゆ依信長坂長岡既終ゆ
始め多武田左馬助信豊ゆ約結を交完山の誓約を義せ給ふ信豊
ゆ取せ給ふ梅雪ゆ始り勝頼を深く恨み給ひ終の叛心を発し
信忠卿ゆ澤集已ゆ居城ゆ攻籠給ふ元より同く
武田ゆ構へ給ふ城く拵武田中を比叡と尽く退散或ひ孫殿
て居城ゆ籠国中今ゆ騒動多り給ひ勝頼後方の陣にもたまう
得ば二月廿八日法長三千余人を引連甲州の新府へ引退く月三
月一日中旬信忠卿天竜川を押渡り真沼原ゆ本陣を居られ川
辺肥前守毛利河内守国平八郎森勝蔵等を先ゆと自身旗本
の勢とおく引連武田方仁科五郎信盛ゆ籠居る高遠の城と河
ひん隔ゆ山城和泉守川の急流あり三方ゆ流れの地ゆ付く頼要

害堅固なり小笠原掃部右衛門尉長時ゆ属し甚後信忠
卿の軍勢尽く川を渡り先ゆ川辺毛利国森の兵ゆ軍兵を進め
遣ゆ寄せ給ふ夫ゆ中旬殿ゆ搦ゆ向ひ給ふ城ゆ仁科五郎信
盛軍大将小山田備中守ゆ敵の勇士なり給ひ味方の城く籠小田
の軍ゆ破られ給ひ也も勢ひ減せ給て矢石と敵ち鉄炮と
打出し防戦給ふ守り給ひ山城のこれ容易落城ゆ難し也
ぞ思給ふ城兵ゆ敵ゆ攻ゆ給ふ武ゆ急ぐ
拵ふ小山田備中守原隼人佐日河内守等二百余人遣ゆ城戸を
開き給ふ三千ゆ斬て出森勝蔵国平八郎ゆ軍兵ゆ
挑戦ひ命を惜ゆ生ゆ死せんゆをぞ乗ひ給ふ御大
将信忠卿搦ゆ向ひ給ひ城中強く攻ゆ御陣自身ゆ


後方
勝右衛門
妻
戦死の図



る馬を進め逆茂木一重引抜き長刀を入て味方を招き城を破らべしてつの用信を宮むべき来られやく進やくと申紀自ら城に乗つき乗入全く完と見て諸軍雀の帰べき我勇と死
者く切ども突もうり見て合せて乗入る城長宮と破らと
と浜辺金左衛門細源左衛門花志銀後守士卒と共に戦ふ中ね
反の小牡山口弟佐藤治右衛門多一番に城に乗入返
方をむぐして切て出れば討る者数とまつ山田出の軍も城方破と
小山田信中守も森勝義と討と士卒悉く討死一族の小田立は
る城中へ乱入行端より切入れ城内仁科五郎信盛も今ハ見とて大中
九郎ハ入て其妻子と刺殺後十人の子ハ撫切て城中に英名を止め
り宮に城兵沼方勝右衛門ハ者の妻子ハ強く男性の女ハ

ろぶ城方級ふと見るとなく白きふ袖を引ちの三人九すの方
表ふりと本丸の城戸押開き出り出近寄武者七八騎もつてく内に
切掛り物多勢の其中に勇と振てうけ入るとあるの素の外ちる女武
者に切ちる三度ほどと除ちる此女も今ハ見まで之と力をはに入
要まて死ちる敵も希みのふるまひ敵も味方も驚嘆とする程
に寄る浜武者に乗入新田ふる程とそ武者討ちる人自殺名ある勇士卒
余人討ち首に百余級級に高遠の城偏ぬ沙兵皆甲斐をさ〜為
地ち外々に

真田阿房守昌幸白青謀

三月三日小田三位中将信忠卿大軍を率し沼方の上の原に押寄り
本陣を宮に居らし沼る城と夷ら三ふ小先に大勇の城を用き

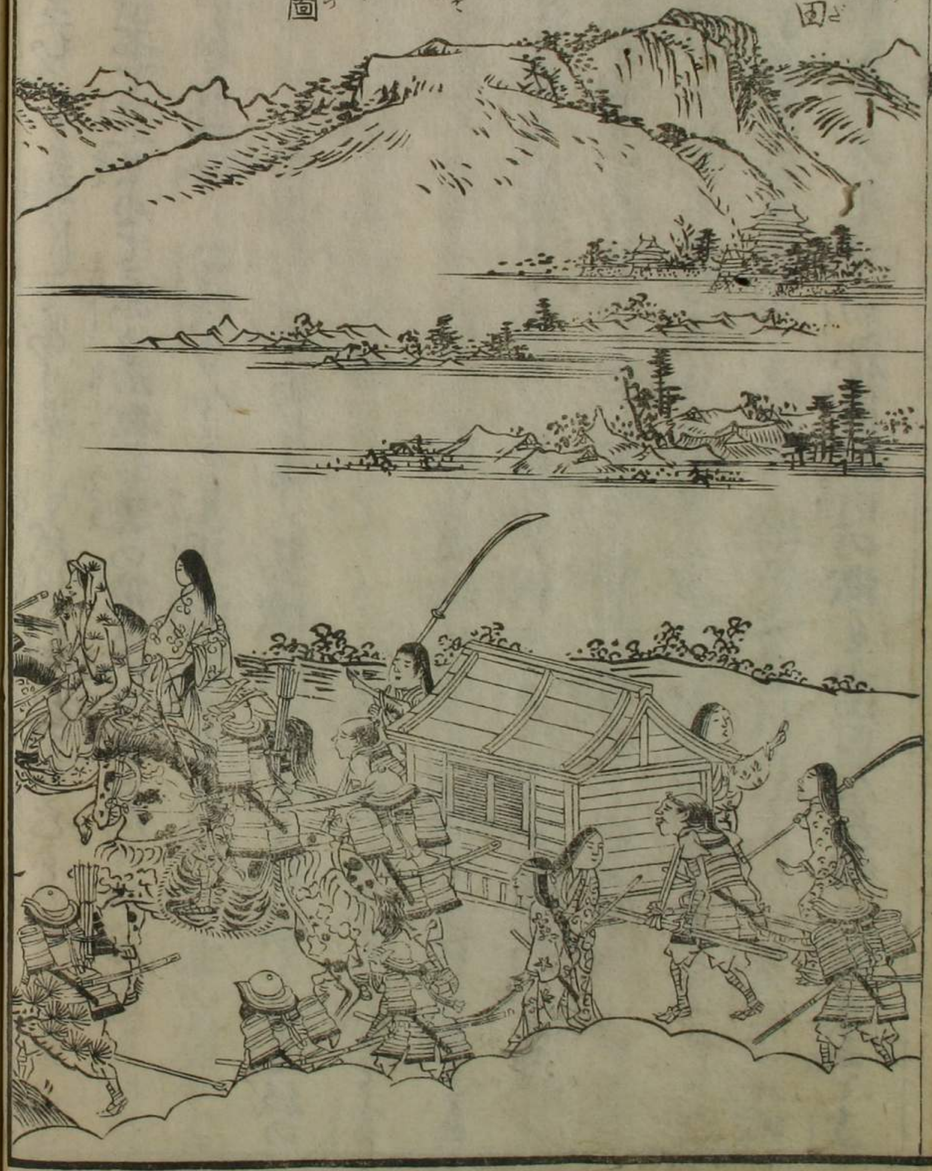
芝田安房守
奇策を演ずる図

安中左近之丞の城より移り居るゆゑ山城も捨て甲府(弦)に添志乃城を馬場美濃守も同用城して退きたれいなる敵一人もなく小田家諸方の軍勢一同に甲府へ乱入し勝頼が親類衆の城落て大軍家に押寄せて甲斐の蠻勇の士方なりし一族家老の人々も一面に妻子と引連て落去るのこうして軍の評議いろ〳〵此時勝頼が嫡子郎信勝丸安房の守に進み出て中々るい味方諸方の城〳〵を小田のゐる所へ分け合い悉く滅亡の時こそ我ら軍勢運盡て戦場に死るハ武門の男勇者の本望なれ安房と云て山林に逃隠るゝ家名汚名なれ何ぞ〳〵口惜きなれいらびや先祖お代の手柄を焼捨切腹せうく〳〵と勧くやうう時に信勝上田上州吾妻三城の主真田安房守昌幸進んで申さるゝ所の計略左れば(たへ)まぐれ害(害)に移る敵を欺て敵を亡さい安きに似て難し

一度は退と退去みて系が居城吾妻の城に入せ給ふ時を待て運と用きのひ敵を欺き全くお續みんとて先祖(尉)義なり〳〵や吾妻の城要害安敵ゆゑ兵粮も多く両三年い籠城に其中に計略を以先級の余顔を集め善代恩顧の老臣をうゝひ敵(賊)會稽の恥を雪んの昌幸が方すゝんし甚論小室の両城へまぐれ敵に落ゝ給ふ

ど頗る味方の助けとなりて系よ〳〵引を去て吾妻の城(所)用きめ〳〵とやはて勝頼大に怒び急ぎ昌幸が勧めに順ひ上及(級)くべしとそまぐ安房守に賜を給て先達て吾妻の城(城)籠城の用意をなさしめ昌幸長子上州へと急ぎ帰る勝頼妻子従類を引連て真田が居城へ引んとする所申加都留郡内の城に小山田左兵衛佐信義之とな

武田勝頼郭内ヘ退く圖



へて中ゝ不上聞も若の外國ゝ[illegible]先若真業の地甲乙ゝて計議
[illegible]何ゝ勝ゝ[illegible]我外地郡内ゝ又濃州の要害ゝ若ゝ[illegible]
の城ゝ移ゝ及ゝ我郡内ゝ開きゝ[illegible]城ゝて敵を待ゝ[illegible]
む此時勝利心神孔ゝ山両条を分別ゝ[illegible]長坂長閑
同長坂言ゝ中ゝ[illegible]
兄弟ゝ左衛門繞ゝ三代ゝ[illegible]小山田の善代ゝ[illegible]
い絶國ゝ郡内ゝ自國也若ゝ吾妻ゝ約ゝ[illegible]
ゝ勝利ゝ[illegible]ゝ郡内ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ本曾左馬ゝ義昌ゝ人質を切腹其外諸方の味方秘心の者ゝ
人質三百余人悉く焼殺忠節の士の人質後ゝ十人計助け出
金銀ゝ[illegible]ゝ自身の室和御母嫡ゝ[illegible]捨ゝ[illegible]人ゝ又三十余人と

下の男女百余人郡内ゝして打ゝ[illegible]ゝ左衛門佐信義を先ゝ立ゝ郡内
へ入ゝ[illegible]城の周ゝ[illegible]ゝ郡内を[illegible]ゝ小松の郷ゝ陣を[illegible]
小山田ゝ左右を[illegible]

武田勝利ゝ[illegible]天目山

三月ゝ日右大臣信長ゝ安土の城を打ゝ[illegible]
着せ給ゝ信忠卿後者を[illegible]の軍の次第ゝ[illegible]仁科ゝ郎信
盛ゝ頭を奉ゝ信長ゝ大ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ七日信忠卿弘方を出ゝ甲府ゝ[illegible]
[illegible]ゝ御陣ゝ[illegible]武田ゝ親族和尤の者ゝ[illegible]
出ゝ武い生捕武い首を刎ゝ[illegible]其人ゝ[illegible]武田遺臣軒日澄宝一條
右衛門佐武田上総介朝比奈摂津守清秋英飛守弘方城中ゝ[illegible]

小山田左兵湧射
人賞を
棄ス
ル図

何とかなるべきなれども扨ひく歴々なる人々之れ中納言殿御中なみ〳〵小田原三郎
勝長國平八郎森勝義を大将として其勢又二万余騎勝頼が外國西上
野より攻む其軍威益昌んなりなるよ武田源二の家臣小幡上総介人質
を献ずて御味方を弾糸と其外甲斐信濃駿河上野の大小の武士名
縁を需人々たより小田の門より来り澤を乞ふ者市のごとく扨も勝頼
を後又百余人い勝ふ源小松の郷より遍国小山田ぶ御近より来り毎々人々て
七日と待ふるふ小山田左兵衛佐忽ち逆心を企て己が命を助らんとて
勝ふ源の旗の篠をもて〳〵付其後勝頼(四)郎を召し人
質をも奪ひ久敵の方に敵のうたい勝頼十方を失ひ今又武田
ぶのうしてて弱勢なる小山田を忘ぶ引列而と小山田ぶ軍勢後殿
をおけ矢を送るの際元より内く強勢国章大方なるべし勝頼止

るなく天目山より落義なる扨も今と付落ひ軍兵詰落矢せて僅よ
に十余人で残りなる長坂長閑跡部大炊介なる日夜物毎我先にま
うせ附なくの云計ひ邪なる函なる列ひ懇ふく侍従之ぶ
人なる先と落矢せく其後なも又ぶなる月十一日田野里(天目山の麓の名)
の郷民なる勝頼の天目山より落と聞きとる所知りて小田原の軍勢源
川左近将監一義ぶ陣より来て走〳〵と先と所よりぶ天目山と云
囲めて源川左近河原肥前守森勝義國平八郎篠崎國平左衛
門源川徐左文小畠殿の陣代源川玄番を以ひ敵万の軍兵天
目山を十重二十重と云囲て国を他り後絶を打ける叫喚で攻上
るい思ひ次第勝頼今日て死期と知ぶれ妻と向ひ
て いまぶ軍勝まるぬ内山と下へ小田原に落行 急もなる

武田信勝
土屋惣蔵
天目山之
欲を
禦ぐ
圖

命をたすけ給へ女のゆへ歌もよみ殺とまで」と宣へ共どうぢく上も二和ま
配せんとて宣へ共「きゝ」勝頼初めの妻い信長公の姪ゝ
信勝を産て其母配今の妻い小笠原氏の妹なり勝頼今川ひて
も捨ゝて彼妻を立て刑殺を後悔ゝに十余人小田の大軍
を引受て切おりゝ戦ひ勇ゝる小田の軍勢と突伏羅伏七頭八
倒して戦ひぬ」とも「勇」小田の大軍進ゝてぞ攻ゝ勝頼
勢ゝ五百騎ゝ強弓の精兵ゝ来る歌十七人矢尾ゝ村剛
力を揃て切捨ゝ孔軍仲ゝ討死を勝頼ゝ嬉ゝ思ゝ郎信勝ゝ年十六
歳宮歌ゝ薬の若武者十ゝ人の後ゝ捨げ舞る歌を三度突ゝ
諸軍の見物ゝ驚ゝ勝頼も自後退ゝ歌ゝ引ゝ令限ゝ戦ゝ
ゝ河尾肥前守稲葉伊豫入ゝ二徹歌後ゝ渕川左近ゝ監

ゝ〳〵ゝ戦て夫ゝ引ゝ時甲斐ゝ武ゝ勇の侍迄弥兵衛と云者郷民ゝ
ゝ百余人を引ゝ天目山の後の山ゝ撰合ゝ切ゝ引ゝ勝頼ゝ
ゝ後ゝ戦ひ労ゝ引ゝ出ゝ配せんとて猶ゝ〳〵一人も残ゝ
皆ゝ宮ゝ戦ゝ引ゝ勝頼三十七歳信勝十六歳ゝ原摂津二十七
歳其余の勇士秋山紀伊守は三十郎小山田平左衛門は弥次郎
九郎六秋山民部は弥次郎は摂津岩下右近は摂九郎小原下野
多田彩義は角助寺倉義信刑部は市丞利家女は義
次郎曽根内膳小尾次郎次は十兵衛安田十郎左衛門は源義
安西平左衛門川村次兵衛雨宮徽部は岩淵郎太夫寺倉藤岳
其子次郎圓蔵鷹匠秋義他義足淫山右源義山下生活丞
小助推名彩義淺右近上下は十七人そく討死武田の家系義

小田の軍兵
天目山を
囲む圖

彩絶えのがれとつゝも抑ろうえ格武田氏い清和の末流にして新羅
三郎義光の後裔武田義清甲斐の封を受く以来九十七世紀百
六十余年にして乙びぬ枝も中務信忠御甲冑信清と肥後河の
の間に流れ居る武田の余党一族を探し捕へ衆を陸ひ仕番ある
先武田左馬助信孝い故信玄の甥にして典厩と称せるへこしと
信忠小室の城を下曽根を雲軍討て去の首を獲る其外板
垣刑部日某女級梭間右衛門尉長坂長閑跡部大炊助小山田
左兵衛佐日向左衛門武田左衛門小芦原弾正郎兵衛等を捕へ甲府
を抑ひく縛せられぬ其余石捕之首を刎られ之を流せらるゝもの
甚多しとゝ雖も来あるべしいそを賜へ家を美田安房守昌幸い
武田の幕下にして其名海内に響き渡へ信長公御ゑ心を寄せ

給ふ者なれば勝頼天目山を生害の後岩殿城吾妻の城み
八ヶ余人搦絶防戦の後を聞小田の大軍寄来べ共して合戦
して運命ない討死せんと縁まうへ所ろ信長公御ゑ
其外の諸将軍衆と海りゆ〻ゑ美田うんい左右ゑ捕ゑ戦ん
とゝ者もなく先角の評定ゑ二両日を過ぎる日月十七日城ゑ
羽柴秀吉守秀吉の城尾義勝吉勝を使者として信長公の御陣
仮城ふ来給へ甲信御平均の住賀と院なり就て伝男御曹司
御次左兵勝若御具足始ちの法ひとして後和国見物郡麦仮
の城を奪ゑ焼ひ言として及びゑれい信長公対て御機嫌うるはしく
御引出物種〻下賜ふ義勝浮でやとるい自人秀吉別ゑ
上い報ゑみ今度武田家の一門家老の内美田安房守昌幸い格

秀吉姫尾義父を
使らして信長ろう
計を謀る図

て謀略あり勇士に付き〳〵に分る用よ延引なん味方の機会を逸せば遂に君
塚上田吉妻の夫塚何程も要害の地ふり坂を以て難く守る由君御感覚を
討ん為に拙者ども共田織より縁せて来たん味方の勢を多く見べ今甲信上
総迄四足く御出て屬ひ上杉田一人其後を捨ん何程のやうに武田一
家平均の上ならく御陣ありせらるべ上杉と招き御味方に加へ給ひ
御用に立べき勇士に成る此一件御望意あて下拙等言上信長を主君
あひ秀吉が計策我主に叶ひ上杉田昌幸妻の塚を攻撃敵對のうとあせども
秀吉が不和なの如く偽り上杉田人が為に軍乗と費べきのみならず未殺て勢
と向ど躊躇してあるが秀吉が上言に我心安りう要に攻陣と信長
き間に高秀吉に中せよ坂尾より城金を場に御勝下されば成功
の難く拙者附て急ぎ援兵へ向うる

繪本太閤記三編巻之四終